

O-5 意味のある作業の提供により主体的な作業参加と疲労感の軽減に繋がった事例

○鳥飼 桃子¹⁾

1) デイサービスつむぎ

Keywords: 疲労, 作業機能障害, 参加

【はじめに】

透析患者の疲労は一般健常者と比較し高く、それにより日常活動量や生活の質(QOL)の低下を引き起こすなど透析疲労による作業への二次的な影響は大きい。しかし、作業療法で疲労感を評価し、本人にとって意味のある作業を用いた介入報告は少ない。よって本報告は、透析疲労により意味のある作業から離れた生活を送っていた事例に対し、意味のある作業に従事できるよう支援した。結果、主体的な作業参加に結びつき、疲労感の軽減に至ったため以下に報告する。尚、報告にあたり本人に説明し同意を得た。

【事例紹介】

A氏, 60歳代, 男性。妻と二人暮らし。高校卒業後、建設会社に勤めた。会社を55歳で退職。X年より透析を開始した。X年+6年より当デイサービスを利用し、現在は透析とデイサービスに交互に通っている。デイサービスでは雑誌や新聞等何かを見て過ごすことが多い。昼食後はすぐにベッドに横になり2時間程度休まれる。水分制限もあり声が乾き、指差して物事を頼むなど指示的なコミュニケーションが目立つ。

【初期評価・介入方針】

作業療法でしたいこと等は「ない」と即答され、介入必要性を感じてもらえるよう、作業機能障害の種類と評価(以下:CAOD)を用いた。記入中に傾眠されたため2回に分けて実施した。結果、47/112点(作業不均衡8/28点, 作業剥奪11/21点, 作業疎外11/21点, 作業周縁化17/42点)。重症度は3/5(軽度の作業機能障害群)であった。疲労感の共有を目的に気分と疲労のチェックリストVer.2(以下:SMSF)を実施し、主観的体験をVisual Analog Scale(100mm)で評価した結果、気分状態が平均50mm, 疲労感は平均55mm, 自身の回復状態は50%と回答した。また、作業選択意思決定支援ソフト((以下:ADOC)では意味のある作業として日曜大工を選択した。現場監督として長い間人の上に立ってきたこと、趣味でも物づくりに関わる人であったことが新たな語りとして聞かれた。物づくりをもう一度してみることを提案し当事業所で使用するための読書台の作成を依頼した。目標は読書台作りを通してもう一度物づくりに関わる機会をもつこととした。

【介入経過】

読書台作りは疲労感の低い午後のベッドでの休息後に行った。A氏の指示のもとで作業を進めることを関わりのポイントとし、オンラインでホームセンターと繋ぎながら材料を選んでもらった。A氏は必要な道具を自宅から持参し、作成の流れや工具の使用方法をOTRに提示した。ADOCを用いた面接後にA氏は自らフロア内の歩行練習と、OTRにマッサージを要求し始めた。A氏の語りからどちらも健康管理を目的に開始した作業であることが分かった。

【結果】

CAODは52/112点(作業不均衡13/28点, 作業剥奪10/21点, 作業疎外10/21点, 作業周縁化19/42点), 重症度は4/5(中等度の作業機能障害群)。SMSFは気分状態が平均40mm, 疲労感は平均45mm, 自身の回復状態は70%, 「あせり」, 「人疲れ」以外の全ての項目で改善が認められた。また、記入に対して意欲的に取り組む姿が見られた。読書台の完成後には「ゴルフも釣りもしたいなあ。次の依頼があったら物作りもせないけんだろ。」と自身の今後について語った。施設内では以前の作業に加え、フロア内歩行とマッサージ、読書台作りが加わった。

【考察】

今回、透析疲労とともに生活を送る事例に対し、意味のある作業に従事できるように支援した。結果、主体的な作業参加に結びつき主観的疲労感及び精神状態は改善した。透析患者に対し意味のある作業を特定し、それに従事している生活リズムを送るよう支援することは、主体的な作業参加と疲労感の軽減に繋がることが示唆された。